

253 腫瘍の一部が、 ^{99m}Tc -pyrophosphate, ^{67}Ga -citrate scintigramでnegativeであった骨肉腫の二症例について

日本歯科大学 R I 研 関 孝和
放 古本 啓一
口外 久野 吉雄
国立病院医療センター 口外 五十嵐盛志

我々は口腔領域の悪性腫瘍の診断に、 ^{99m}Tc -pyrophosphate, ^{67}Ga -citrateの併用スキャンを行っている。今回、手術所見と ^{99m}Tc -pyrophosphate, ^{67}Ga -citrate scintigram所見の比較検討の結果、腫瘍が存在しながら二つのscintigram所見とも腫瘍の一部を描写し得なかった骨肉腫の二症例を経験したので報告する。

症例Ⅰ. K.K. 男性・17才、主訴：左側大臼歯部の腫脹。二者のscintigramでは左側顎洞の下部 $\frac{1}{2}$ が強い陽性に描写され、手術時の所見の左上顎洞内の腫瘍の位置、および大きさはほぼscintigram所見通りであったが口腔内に腫脹した腫瘍部分は陰性に描写され、摘出腫瘍の病理所見ではscintigram陰性部分は変性が強く見られた。

症例Ⅱ. K.K. 女性・30才、右側下顎骨の顎関節部分に近い部位にX線学的に腫瘍が発見され、病理所見は骨肉腫であった。 ^{67}Ga -citrate, ^{99m}Tc -pyrophosphate scintigramを施行し下顎関節頭部の離断手術を施行した。この時の所見とscintigram所見はほぼ一致していたが、3年後右側上顎より口腔内に腫脹が認められ、scintigramを施行したが、右側眼窩縁部には強い陽性像を認めた。しかし、この部と口腔の腫脹部との間は陽性に描写されなかった。手術所見では右側眼窩下縁部に母指頭大の腫瘍があり、その腫瘍より $\frac{1}{2}$ 小指大の細長い腫瘍部が口腔内まで達していた。

摘出標本のscintigram陰性であった細長い腫瘍部の病理所見では変性が認められた。

以上の二症例について考察を行う予定である。

254

PHO/CON多層断層装置による骨シンチグラム所見

東京慈恵会医科大学 整形外科
○大森薫雄, 伊丹康人
同 放射線科
河上憲司, 勝山直文

我々は昨年より当大学で稼動している、Searle Radiographic社が開発したPHO/CON多層断層装置を用いて各種骨疾患の骨シンチグラムをとったので、症例を供覧するとともに骨疾患での診断的価値について報告する。

対象および方法

昭和51年4月より現在までPHO/CONによっておこなった骨シンチグラムは303件である。骨スキャンTc- 磷酸化合物10mCi 静注後3時間でおこなった。PHO/CONはシンチカメラとシンチキヤナーの特徴を有効に生かしたもので、検出器としては従来のシンチカメラを小型にしたものを用い、シンチキヤナーと同じような方式で駆動する。全身骨シンチグラムをとる場合、走査面積は176×65cm、断層間隔18.9cm、走査速度700cm分、走査時間は約40分である、1回の検査で明確な12断面像がえられる。

(結果)

従来用いられているシンチスキャナーあるいはシンチカメラによる骨シンチグラムは、体内におけるRI分布を一平面へ投影したものであり、深さに関する情報が含まれていない。したがって諸臓器が重なっている場合とか、厚みのある場所ではどの部位の病巣であるかはっきりしないという欠点があった。この点PHO/CONでは任意の厚さで体軸方向に12面の断層像をえることができるので、周囲臓器の影響も少なく、深層にある病巣の描出もこれまでの方法に比較するとはるかに明瞭で、とくに胸廓、骨盤部に点存する病巣も重さなりあいなく把握することができる。

また仮関節については従来一塊の集積像としてとらえられていたが、PHO/CONでは明らかな欠損像としてえられ、この点診断的価値が高いと考えられる。